

## アイキャンプ報告書

柏瀬 光寿

2003年12月に行われたインド・ダラムサラでのアイキャンプに参加しました。AOCAと波百流から派遣により、一年間、現地に滞在し、2003年7月に離れてから最初のアイキャンプであった。離印の際に多くの不安を感じていたが、今回、再び現地に足を踏み入れ、私が実際に感じた事を報告します。

### テンジン（OA）の成長

昨年7月にダラムサラを離れ、その後テンジンがどのくらいモチベーションを維持して日常の診療に臨んでいるか不安に感じていたが、実際に彼の言動や診察、周囲の人たちの言葉より、私の心配は無用であったようだ。まずは診察の基本であるスリットランプの使い方。2002年に赴任した当初は両眼視もできず単眼視で診察を行っていたため、スリットランプ下での睫毛抜去や異物除去、抜糸などは行えずにいた。その後、両眼視の必要性を説明し日々訓練することにより数週間で両眼視ができるようになり、様々な処置も確実に施せるようになった。今回、彼の診察風景をみたところ、スリットランプの使い方については熟練度が増しており、彼が確実に進歩していることが伺えた。また90Dを用いた眼底検査も行えるようになっていた。これはDr. Puriでさえ使いこなせず、彼が「これはどうやって使うのか？」とテンジンに使用法を尋ねたらしい（彼の日常診療は懐中電灯を用いており、VIP患者のみスリットランプで診察をしている）。また倒像鏡を用いた眼底検査も、以前はブレのあったレンズを持つ左手はしっかりと安定し、眼底所見も的確に捉えていた。昨年の10月には院長Dr. Tsetanから、ある患者の眼底検査の依頼があったそうだ。テンジンがどの程度、眼底所見を捕らえられるのか、をチェックするDr. Tsetanのテストだったようで、彼は自分の持っているテクニックおよび知識を駆使して、こと細かく書いたレポートを提出した。その結果にDr. Tsetanは大変満足し、その後は糖尿病や高血圧患者の眼底検査を頻繁に依頼するようになってきた、と喜んで話していた。また海外からのボランティア・ドクターも眼科診察の見学に來たり、疾患に対する相談を持ちかけてくるようになったそうだ。Delek hosp.での彼の信頼度は明らかに増したようだ。

それに対しインド人ドクターDr. Puriの信頼度は残念ながら落ちてきている

(Delek hosp.のスタッフは2000年に初めて行われたアイキャンプ当初から彼の事はあまり信用していなかった)。原因は週1回のDelek hosp.での診察を約束しておいたにも関わらず、私がダラムサラを離れた2003年7月から12月の間に結局5回しか来ず、彼の来院を期待していたDr.Tsetanやテンジン、さらには待ちぼうけを食らった多くの患者からの信頼を失ってしまったようだ。確かに自分の病院Sonar hospがあるため融通が利かないときがあるのは致し方ないが、それでも30%くらいしか約束を果たせないのでは・・・Dr.Tsetanもすっかり諦めており、「他の医師を探さなくては。ただしEye campのためにもDr.Puriとの関係は保っていかなくては・・・」と困った顔をしていた。

### アイキャンプ

今回のアイキャンプに対するDelek側の準備(ほとんど全てテンジンが一人でやったと思われる)は、完璧とは云えないが我々を十分に満足させるものであった。オペ患者に対する麻酔も自信を持って行っており、その手技も問題なく、手術の最後まで麻酔効果は持続していた。

病院スタッフのヘルプも年を追うごとに確実かつ緻密になり、アイキャンプで誰が何をすればいいのか分担がしっかりとでき、敢えてこちらから云わなくても自主的に動けるようになってきた。今回、アイキャンプ中にチベット暦の祝日があった(公休日)にも関わらず、オペや外来をすることを賛成してくれた(以前なら間違いなく彼女らは休みを主張し、我々も中休みをせざるを得なかっただろう)のも、彼らのアイキャンプに対する協力体制の向上に伴うものだと思う。

テンジンは私がダラムサラを離れた後もしっかりと努力し日々の診療を行っているようで、とても頼もしくみえた。アイキャンプのための白内障患者をみつけるべく行いたいアイキャンプ前のスクリーニングに関して、テンジンにはその能力が備わりつつあると思われる。ただしOAの認識度が高いネパールとは違いインドでは、患者は診察するのがドクターでないとなかなか信用してくれない、という現状があるため、我々が「スクリーニングをやれ」といっても現状は厳しいと思う。

### 小川君のヘルプ

今回も小川君が通訳として大活躍してくれた。彼はMen-tsee khang(チベッ

ト伝統医学占星術学校)の学生としてだけでなく通訳としても現地で活躍しており、ほぼ完璧(本人談)なチベットを話す。チベット語から英語への通訳、さらに英語から日本語への翻訳は英語力に問題のある我々にはいつも大きな障害となっていた。しかし前回に続いて今回も彼が直接、日本語に訳してくれたお陰で、私だけでなく岡田先生も坂本さんも大いに助かったと思う。また彼の働きかけにより、初めて Men-tsee khang の生徒が西洋医学(手術)を見学するチャンスが生まれた。表面的には Delek も Men-tsee khang も仲は良いことになっているが現状は異なり、今まで両院の交流はほとんどなく、小川君は「Men-tsee Khang、否、ダラムサラ始まって以来のことだ!」と興奮して話していた。また Men-tsee khang のトップになられたダワ先生(一昨年、富山医科大で客員教授として一年間、日本に滞在)も今回の試みを大変評価されていた。特に実際に見学をした生徒には初めて見る手術はとても衝撃的だった(良い意味で)らしく、その生徒達の話聞きつけ希望者が多くいたとのことだ。生徒は教科書を寄附してくれ、しかも手術を見学させてくれた波百流にとっても感謝していた。そして「是非、来年も」との声も聞かれた。

恒例のロータリー主催のパーティーでは、Dr. Tsetan がスピーチの中で「Ogawa はとてもよく働いてくれ、感謝している」と、名前を挙げて賞賛していた。彼は今、Men-tsee khang の3年生で、あと3年間はダラムサラにいる。アイキャンプの時期はちょうど試験が終わった直後であるため時間を作りやすく、ヘルプを頼めば嫌とは云わないと思われる。ただあくまで彼は個人的に手伝ってくれており、今後も通訳をお願いする場合には何らかのお礼が必要だと思われる。

## Vimar の存在

顕微鏡をレンタルした Medica international の Vimar も昨年同様、とてもいい働きをしてくれた。彼の性格はとても素晴らしく、常に「アイキャンプのために、Japanese team のために」と一生懸命働いてくれ、今回、顕微鏡レンタル延長の件でも自ら率先してプレジデントにネゴシエーションをしてくれ、大いに我々の力になってくれた。今までの実績と彼の性格は多くの人から認められ、ロータリーのメンバーも Dr. Tsetan もスピーチの中で絶賛していた。今後も彼の力は大きいに必要である。